

1.1 工学系地区基本設計の役割

(1) 地区別基本設計の位置づけ

地区別基本設計とは、各施設の基本・実施設計に先立ち、移転順序案に基づく適切な時期に、マスタープランおよび関連部局のアカデミック・プランに基づき、各地区（ブロック）単位で行うものである。

地区別基本設計では、地区全体の配置計画（各施設、道路、駐車場、オープンスペース等の配置計画）および各施設の概略設計等を行う。

(2) 工学系地区基本設計の役割

工学系地区基本設計は、マスタープランおよびアカデミック・プランを受けて行う最初の地区別基本設計である。よって、本地区基本設計において定める方針や施設設計が、今後の新キャンパスの方向性を示すものとして重要な役割を担うこととなる。

特に、本地区基本設計において定めるデザイン・ガイドラインは、今後の新キャンパスのデザインを方向づけ、新たな伝統を創り出す出発点となる。

右に、この「工学系地区基本設計 計画説明書」において提示する項目の構成フローを示す。

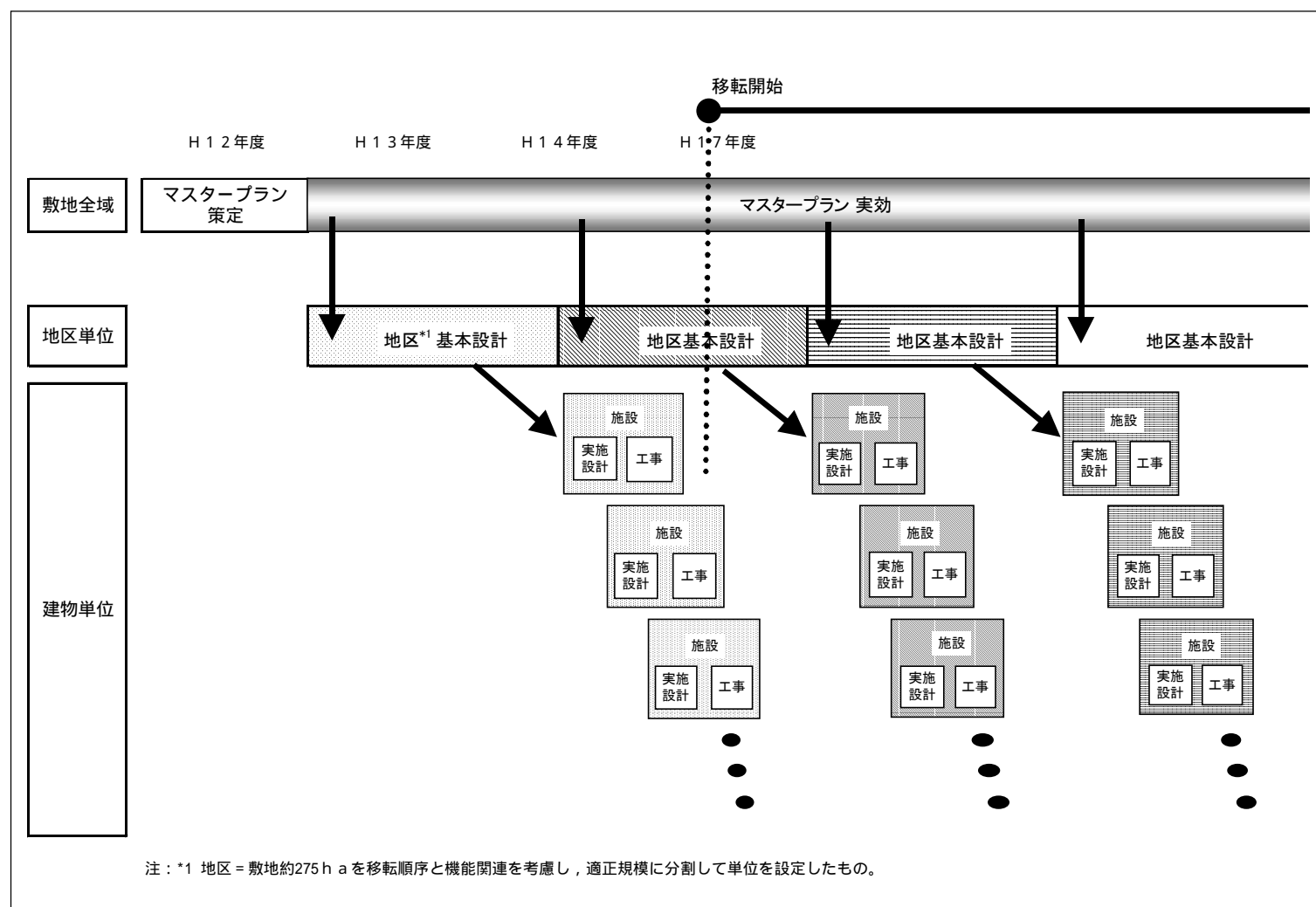


図1-1-1 マスタープランにおける研究教育施設の整備の進め方のイメージ

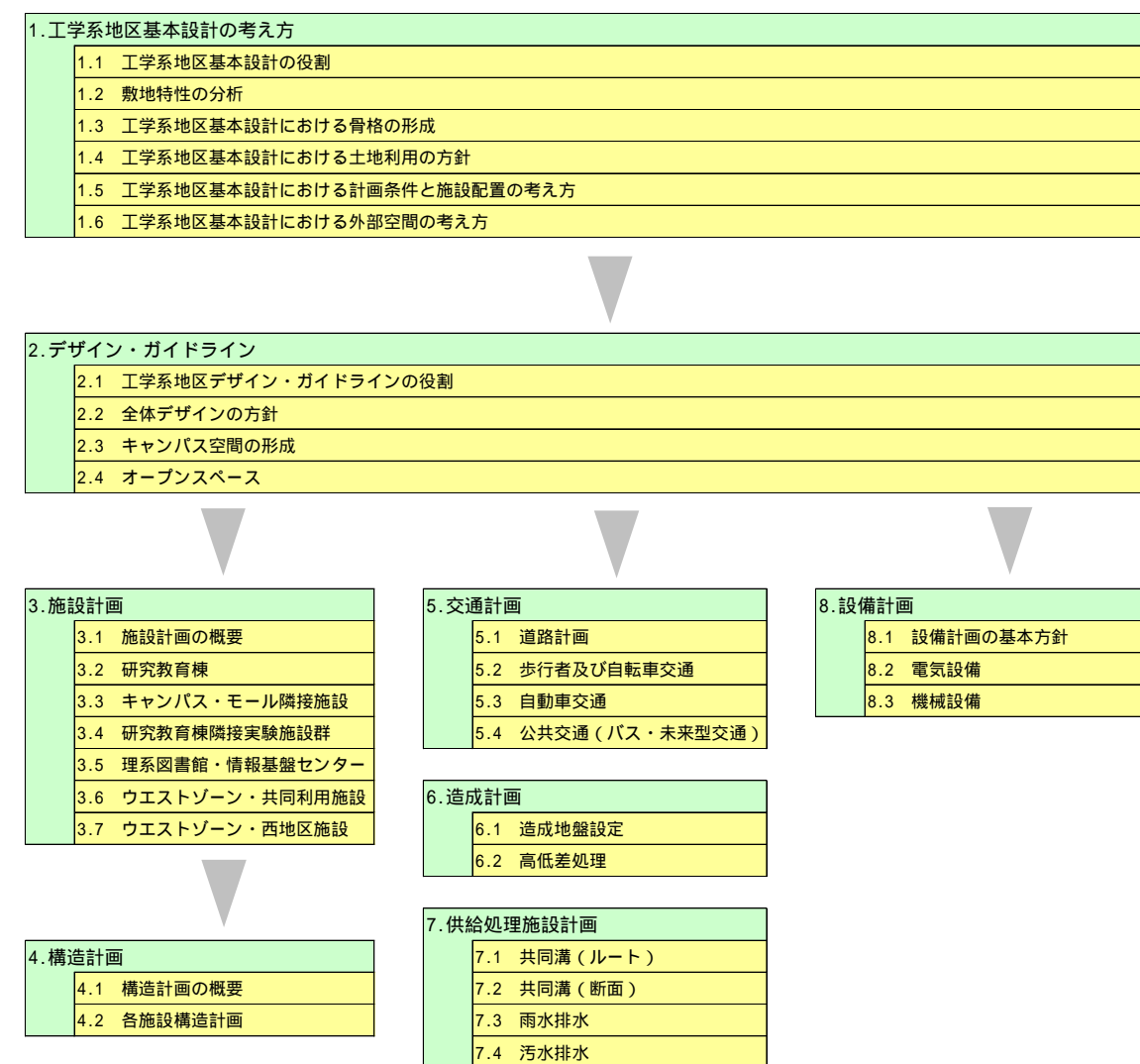


図1-1-2 工学系地区基本設計の構成

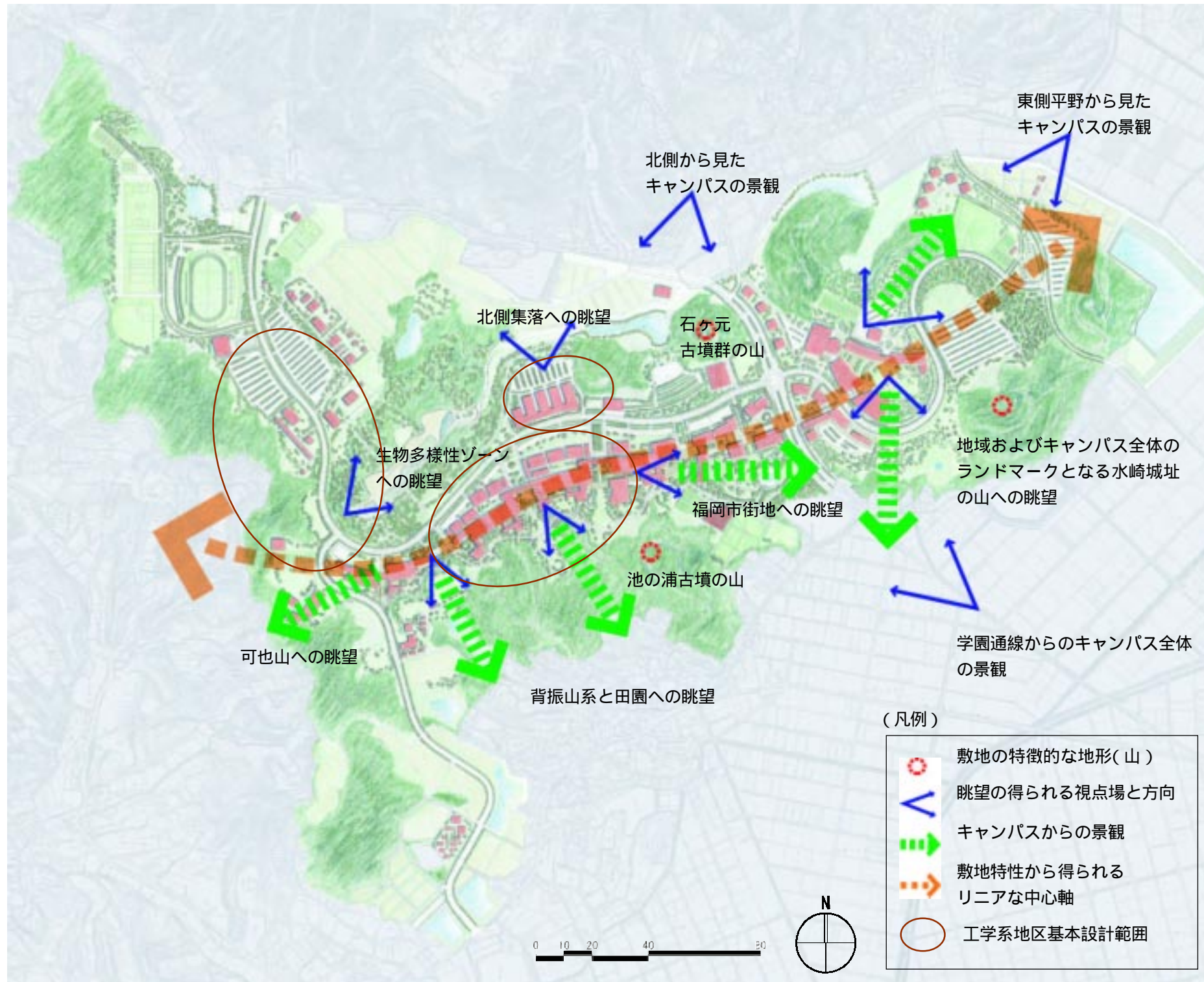


図1-2-1 敷地分析図

(1) 敷地形状

(眺望と景観)

起伏のある敷地形状により、博多湾、福岡市街地、背振山系と田園、地域のランドマークである可也山などの特徴的遠景要素をキャンパス内から望むことができる。さらに、水崎城址の山は、地域およびキャンパス全体のランドマークであり、その眺望への配慮が必要である。

また同時に周辺からの、キャンパス内の施設群が創り出す景観と周囲の山並みや集落等との調和に配慮が必要である。

(地形との調和)

可也山と毘沙門山を結ぶキャンパス中央を貫く東西軸と、尾根・谷・保全緑地等の地形が織りなす地理的特徴から、東西を一体的につなぎ、周辺地形になじむ自然なキャンパスの中心軸が導かれる。

(2) 保全すべき資源

キャンパス用地内には、前方後円墳・円墳等の歴史的環境資源、生物多様性保全ゾーンや緑地等の自然環境資源など保全すべき環境資源が点在している。

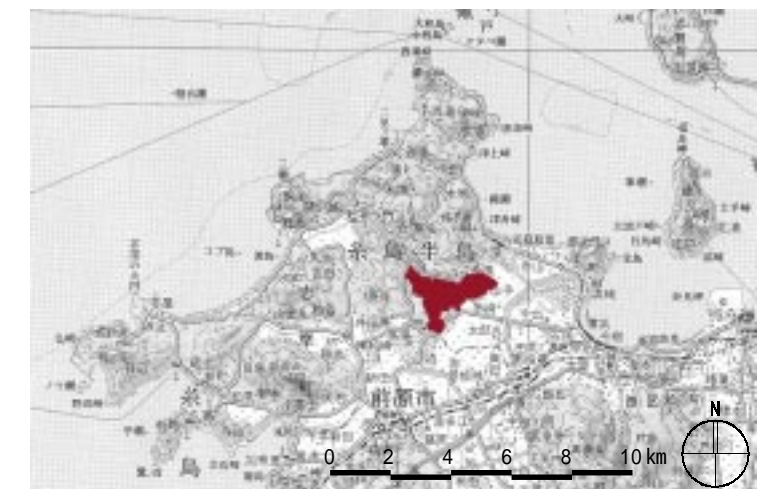


図1-2-2 新キャンパス位置図

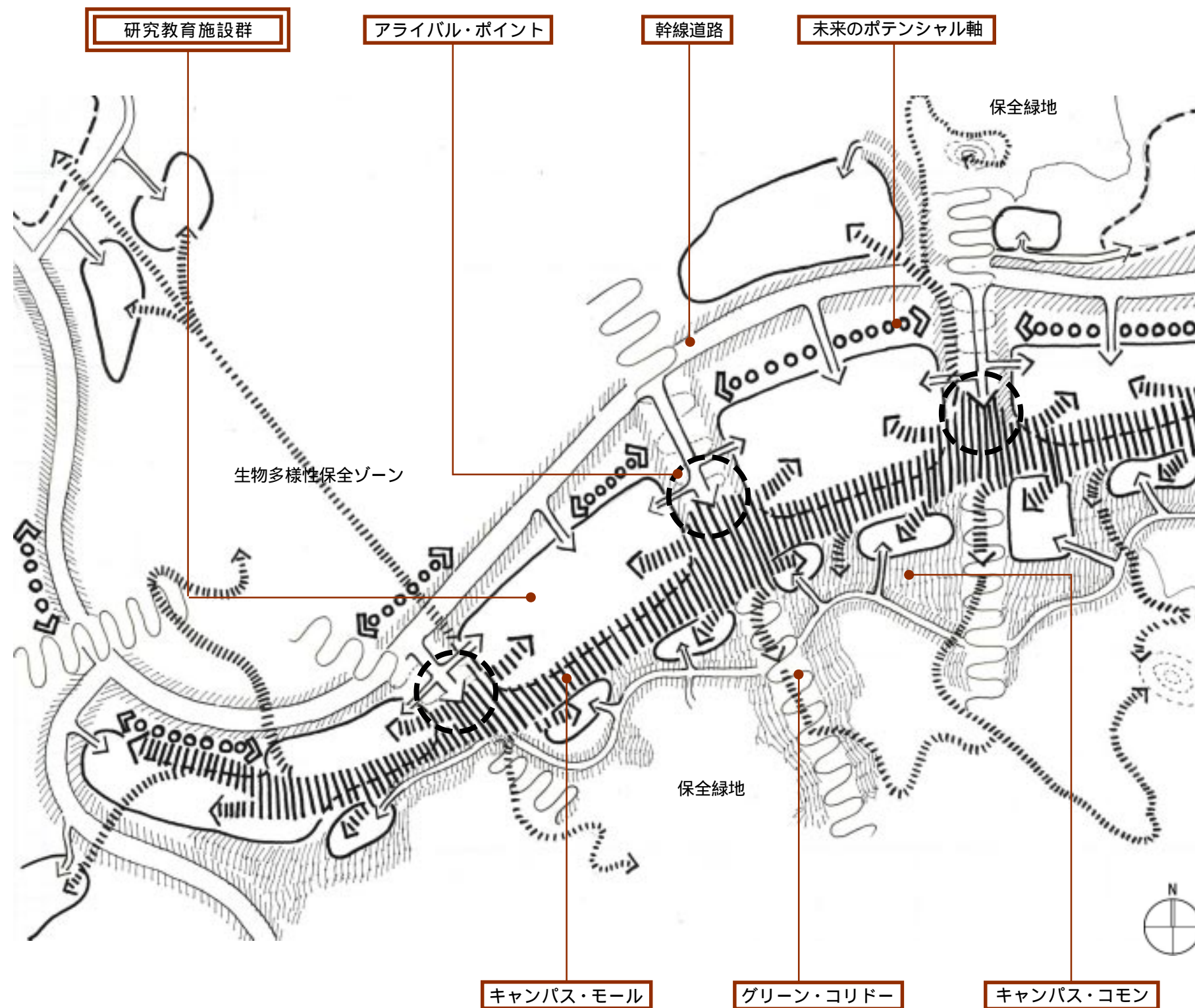


図1-3-1 マスタープランにおける工学系地区の骨格形成の概念

マスタープランで定められた新キャンパスを形成する骨格の考え方を工学系地区基本設計においても継承し、研究施設群とともに空間を構成する。

- (1) キャンパス・モール
 - ・学際的な研究教育活動をつなぐ連続的な空間軸
 - ・キャンパス内の歩行者動線の中心軸
- (2) 未来のポテンシャル軸
 - ・未来を拓く戦略的施設群が立地する連続した空間軸
- (3) 幹線道路
 - ・自動車交通や設備インフラストラクチャーのルートとしてのキャンパスの動脈
- (4) キャンパス・コモン
 - ・アカデミック・ゾーンの南に連続する開放的なオープンスペース群
 - ・寄附施設等の全学的利用施設の立地用地
 - ・未来へと継承していく象徴的空間
- (5) グリーン・コリドー
 - ・保全緑地をつなぎ、緑・生態系をネットワークする回廊
 - ・東西に長い敷地を適度なスケールで分節する緑の空間
- (6) アライバル・ポイント
 - ・幹線道路から、各研究教育施設もしくはキャンパス・モールに自動車交通が寄り付く場所
 - ・各領域のゲート空間としての象徴的空間

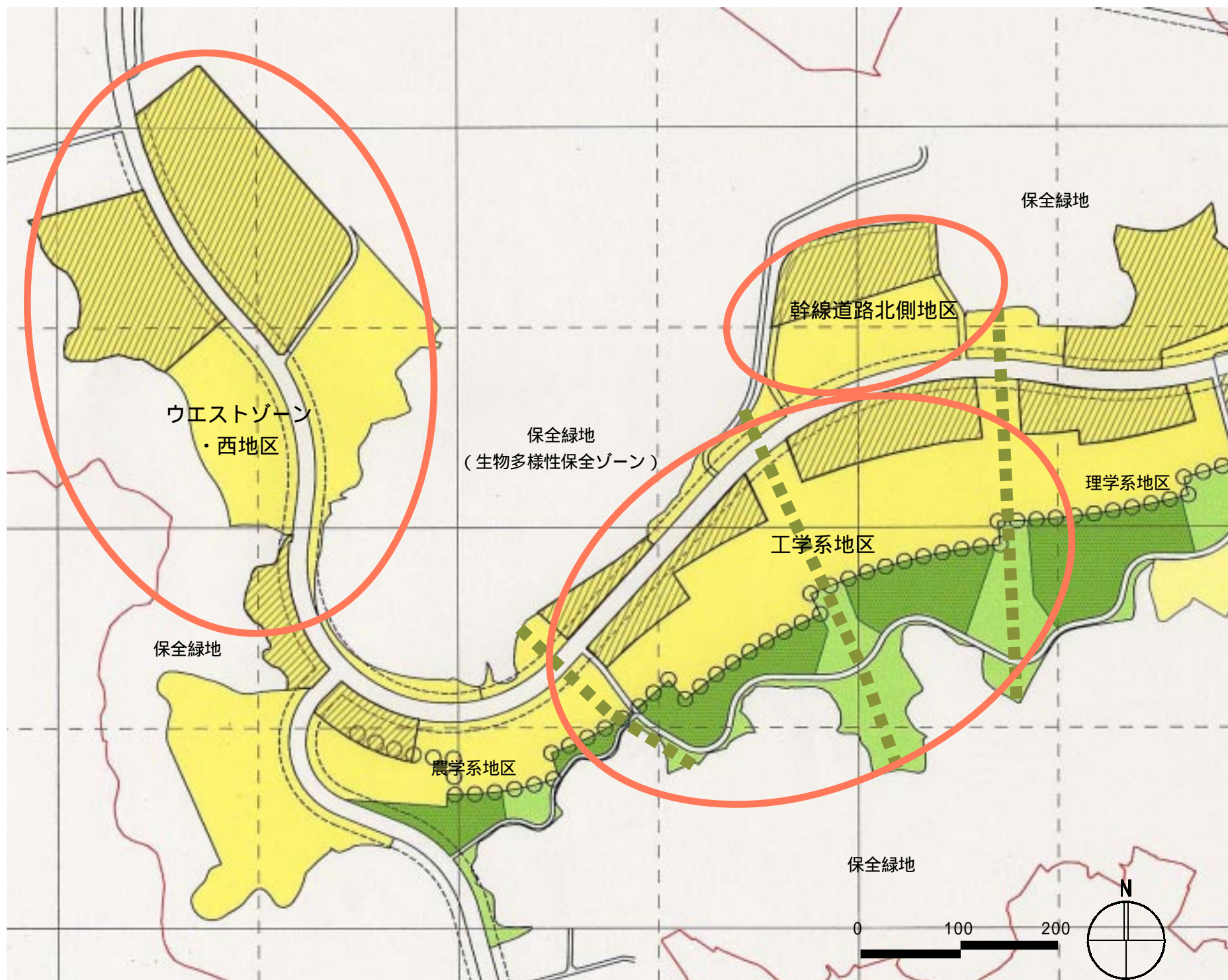


図1-4-1 マスタープランにおける土地利用方針と工学系地区基本設計範囲の区分

(1) 土地利用方針

マスタープランにおいて、敷地の中から保全緑地を確保したうえで定義された有効敷地範囲を、本工学系地区基本設計の土地利用の対象とする。施設用地、オープンスペース等の範囲の設定については、以下に定義する。

(2) 対象範囲の区分

工学系地区基本設計の対象範囲を「工学系地区」「幹線道路北側地区」「ウエストゾーン・西地区」の3つに区分する。各地区の計画を行うにあたり、隣接する「理学系地区」や「農学系地区」との関係、および各地区の特性等に配慮する。

「工学系地区」

中心軸であるキャンパス・モールに沿って南側にキャンパス・コモン、北側に研究教育棟をはじめとする研究教育施設群を配置する。

「幹線道路北側地区」

幹線道路に接し、ウエストゾーンのほぼ中央に位置することから、共同利用施設等を配置する。

「ウエストゾーン・西地区」

切土地盤が多く、まとめて大きなスペースが確保できることなどから、主に特殊実験施設群を配置する。

(凡例)

	施設用地
	将来建設用地
	キャンパス・コモンを構成するオープンスペース
	キャンパス・コモンを構成する施設用地 * 建物用途、空地率、建物高さ、緑化率等に配慮し、キャンパス・コモンとしての環境を形成する用地
	壁面線 * 道路境界線から10mとする
	キャンパス・モールの位置
	グリーン・コリドーの概略位置
	工学系地区基本設計範囲

1.5 工学系地区基本設計における計画条件と施設配置の考え方

幹線道路

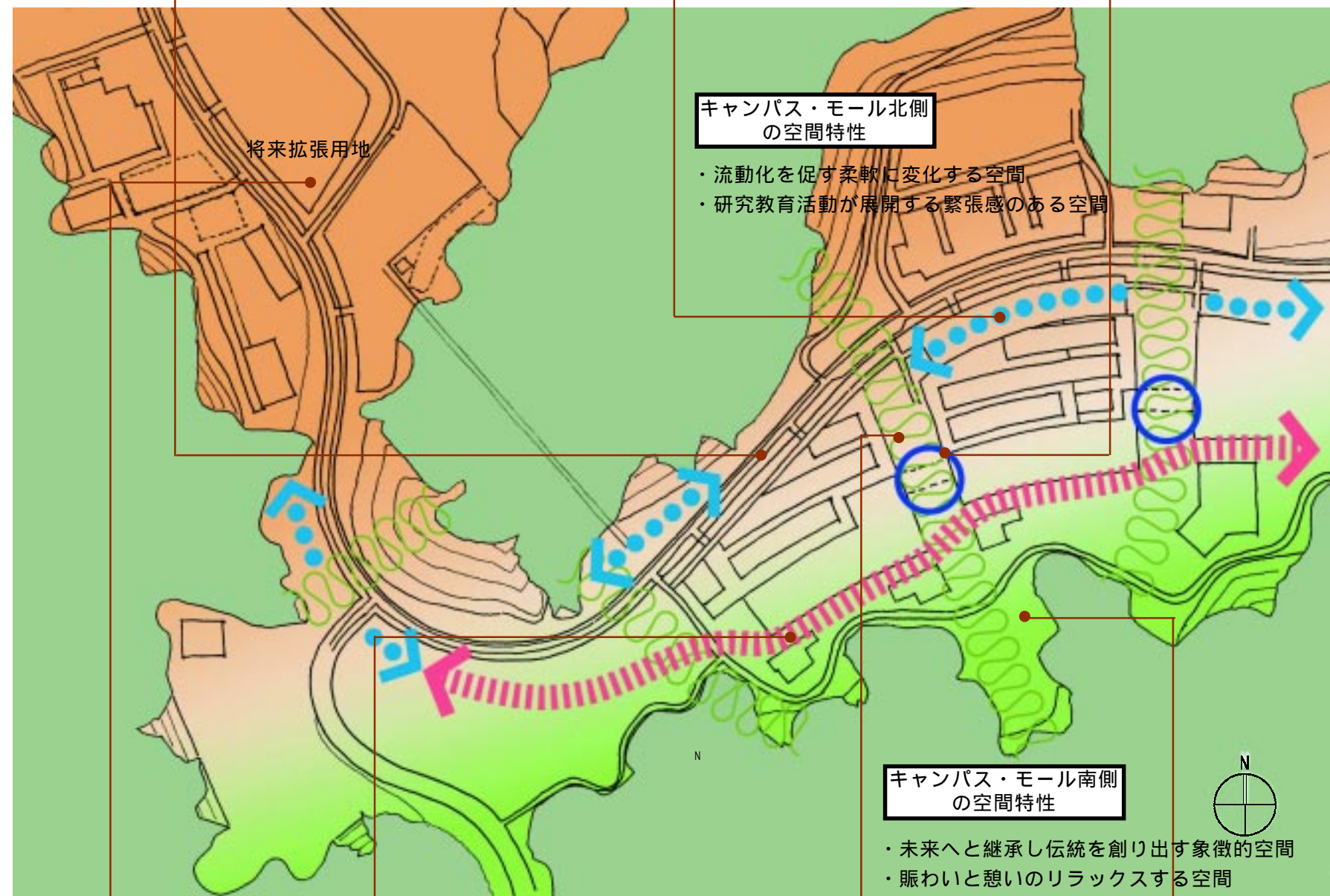
キャンパス全体の動線・ライフラインとしての役割を果たしながら幹線道路沿いの良好な環境、生物多様性保全ゾーン等の維持のため、幹線道路に緑地を整備するとともに、道路からの施設の見え方にも配慮し、計画する。

未来のポテンシャル軸

幹線道路に沿って、未来を拓く戦略的施設群の立地用地を確保する。工学系地区においては主に来学者用の駐車スペースとして景観に配慮しながら計画する。

アライバル・ポイント

幹線道路からキャンパス・モールに入るゲート空間であり、各地区の性格を代表する象徴的空間となるように配慮する。



キャンパス・モール北側の空間特性

- ・流動化を促す柔軟に変化する空間
- ・研究教育活動が展開する緊張感のある空間

キャンパス・モール南側の空間特性

- ・未来へと継承し伝統を創り出す象徴的空間
- ・賑わいと憩いのリラックスする空間

(1) 施設配置の考え方

キャンパス・モールを中心にして、マスタープランにおける土地利用の方針やキャンパスの骨格による南北それぞれの空間の特性を把握し、施設の適切な配置を行う。

- 1) キャンパス・モール北側の空間特性
 - ・流動化を促す柔軟に変化する空間
 - ・研究教育活動が展開する緊張感のある空間
- 2) キャンパス・モール南側の空間特性
 - ・新たな伝統を創り出す象徴的空間
 - ・賑わいと憩いのリラックスする空間

(2) マスタープランをふまえた工学系地区基本設計における重要事項

工学系地区基本設計においては、マスタープランの中で空間モデルとして設定した土地利用計画について、更なる詳細な検討を進め、以下のように土地利用を行う。

- 1) キャンパス・コモン

工学系地区における研究教育施設のボリュームと調和したオープンスペースを確保する。
- 2) 未来のポテンシャル軸

工学系地区における、東ブロックと西ブロックの施設ボリューム配分の関係に配慮し、マスタープランにおいて両ブロックに均等に配置していた駐車スペースを東ブロックに集約配置する。
- 3) 将来拡張用地

ウエストゾーン・西地区において、施設の機能連携やまとまりのある将来拡張用地の確保のため、幹線道路西側に施設用地、東側に大型駐車場(将来拡張用地)をそれぞれ集約配置する。

ウエストゾーン・西地区

幹線道路西側に施設用地、東側に大型駐車場(将来拡張用地)をそれぞれ集約配置する。

キャンパス・モール

東西に長いキャンパスを繋ぐ、歩行者動線の中心軸であり、賑わいを生む空間としてしつらえる。敷地の高低差を生かしながら、ユニバーサルデザインを基本とし、スムーズな移動ができるよう動線を確保する。

グリーン・コリドー

南北の保全緑地をつなぎ緑・生態系をネットワークする。敷地南北に繋がる、視線の通り抜けを確保する。

キャンパス・コモン

キャンパス・コモン内に建つ施設は、南側に広がる田園地帯、背振山系等への研究教育棟からの眺望に配慮する。

図1-5-1 工学系地区基本設計における条件となる骨格と考え方

(1) シークエンスの変化に富んだ「キャンパス・モール」

人間主体の快適で賑わいのある空間形成を目指す。全体として緩やかな勾配をスロープ、階段の併用で処理し、沿道の研究教育棟の低層部とオープンスペースが一体となった、それ自身楽しめる歩行者優先の空間とする。

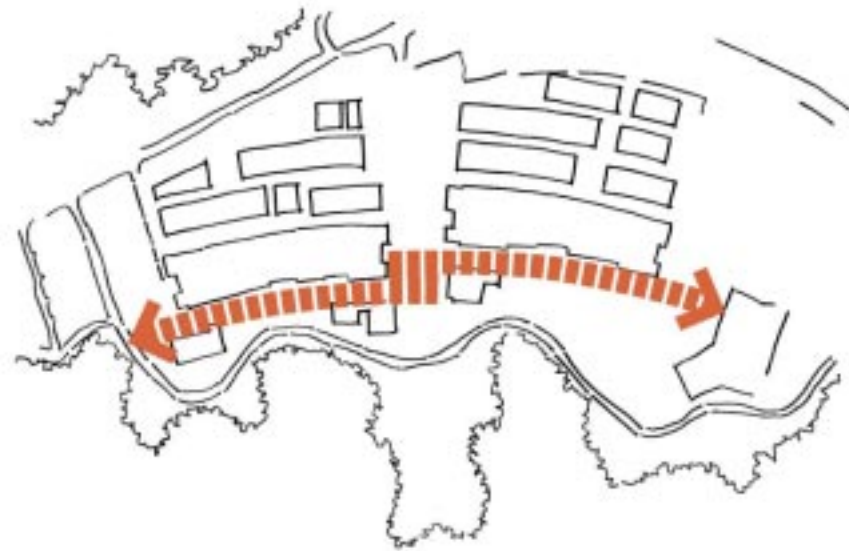


図1-6-1 キャンパス・モール

(2) 場所の特性を活かした「グリーン・コリドー」

生態系の連続性を保持するために、工学系地区南北の周辺緑地を繋ぐグリーン・コリドーは、各場所の地形特性、周辺自然環境、及び施設配置計画を考慮して、風、水、植栽をテーマとした空間とする。



図1-6-2 グリーン・コリドー

(3) 多様な欲求を充足させる様々な場の形成

学生・教職員あるいは来訪者の多様な欲求を充足させるキャンパス環境を形成するため、出会い、休息、語らいのために人々の流れが止まり、溜まることができる「場」をしつらえる。

それぞれの場は、キャンパス内の街角や辻にふさわしくデザインする。

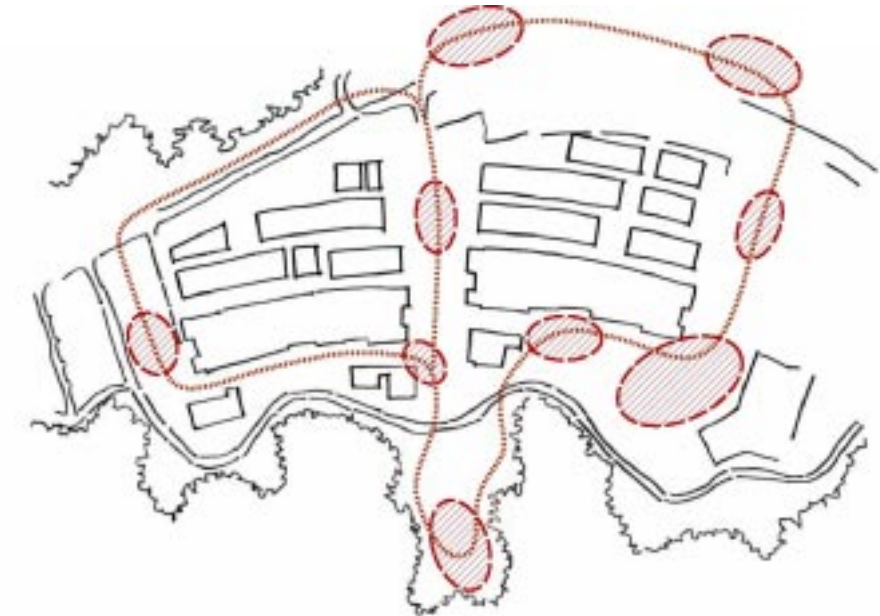


図1-6-3 様々な場の形成

(4) 建築とオープンスペースの融合

吹抜けやピロティによる空間は外部空間を引込み、材料・色彩などに配慮し、さらに施設内植栽による緑の連続を図り、建築とオープンスペースとの明るい融合空間を表現する。

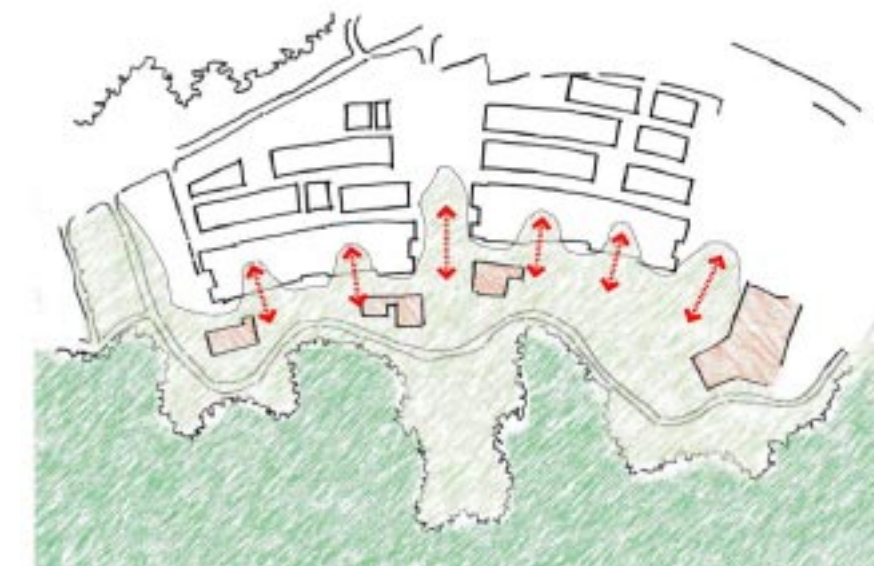


図1-6-4 建築とオープンスペースの融合